
勇者な僕のくえすと

ジュリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者な僕のくえすと

【Nコード】

N7660C

【作者名】

ジュリア

【あらすじ】

僕が見つけたのは、僕が小さい頃に流行ったゲームの大作だった。最近知った裏ワザを使って見たかったこともあり、早速やってみるのだが……

序章

俺の名前は神崎進。言ってみるなら僕はゲーマーである。発売されたほとんどのゲームはほとんど攻略済みで、その豊富な知識(?)でゲームコメンテーターとして働いている。そんな僕が、自分の部屋を掃除していると・・・

ガサガサ・・・ゴト・・・

ん?なんだこれは?

それは10年程前にゲームブームの引き金となった「おらゴンクエスト」ではないか!!!しかもシリーズで一番面白かった3である。

うおゝナツカシゝ

言うまでもなく即プレイ!

このゲームは裏技があり、名前選択で「最強さん」といれると、全パラ999のアイテムフルコンプの状態が始まるのだ。ただそれをやると、とてつもなくつまらないので今まで一度もやっていなかった。

じゃあやってみるか。

今まで物語のキャラの台詞を暗唱できるくらいやり込んだゲームにスイッチを入れる。

そこに可憐な女神様が現れ、

「あなたの名前は？」

と聞いてくる。

僕は当然、「最強さん」と入れる。

・・・たしかこの後「それでは冒険のたびへ！」って言うんだっけ？・・・と期待しながらAボタンを押す。

すると女神様は突然微笑み、

「待つておりました勇者様！」

と言い放った。

あれ？こんなこと言ってたっけ？

と思った瞬間・・・

グラリ・・・

ん！？なんだ？

僕の部屋の周りの風景が歪んでいく。何が起こっているんだ？

とそのとき、ピカッとあたりが光ると僕はその光に吸い込まれていった。

・・・

「???」起きなさい、最強さん」

ん?なんだ?

気がつくと僕は暖かいベッドの中で眠りこけていた。

「???」起きなさい、最強さん。国王様がお呼びよ。」

ん?この台詞、どこかで聞いたことがあるような・・・

はっ!!!分かった!これは確かおらゴンクエストの冒頭部分ではないか!

そして目の前に立っているのは、主人公の母親。勇者ノトスの妻である。

どうやら、ゲームの中に吸い込まれてしまったらしい・・・

母親「起きなさい、最強さん。起きなさい最強さん・・・」

そうだ!起きないと一生このループが続くんだった

起きようとして立ち上がると、本来付けている布の服ではなく、神龍の鎧を付け、腰にはエクスカリバーがささっていた。

アイテムコンプの威力とは未恐ろしいものだなど、実感した。

母親「それでは、王宮に向かうのよ。道は分かる?」

当然知っているが、ここで、いいえと言っておけば王宮まで自動で連れてってくれるのだ。

最強さん「いいえ」

うおおおおおー！なんて無機質な回答！現代じゃありえん発言だな。

母親「あらそうなの？じゃあ今回は私が連れてってあげましょう。まず家を出たら・・・」

べらべらしゃべられても全部知ってるからな

母親「・・・すると国王様のお部屋よ。じゃあ行きましょう。」

というひとりでに僕の体が動き出す。・・・うわー変な気分。

まあとりあえず・・・これからどうしよう？

そんなことはお構いなしに主人公の母親は無表情でずんずん歩いていく。

続く。

序章（後書き）

短いですが、その辺は駆け出しってことで勘弁してください（何
こんなノリで次もどうぞよろしく

第二章

国王「おお！よくぞ参られた！伝説の勇者の息子最強さんよ！」

これがこの国の王様。そのくせに名前がない。このあと何か頼みごとをされるんだっけ？

国王「突然だが、わが国の商業都市が魔物の被害を受けたらしい。悪いが早急に退治してはくれぬか？」

やっぱり。っていつかこの国の護衛隊はなにやってんだろう？・・・

で、勇者が国を出た隙に魔物の大将が攻め込んできて、姫がさらわれるんだっとな。

最強さん「分かりました。」

しかたねえ、行つて来るか。

一歩城の外に出ると僕はテレポーテーションを唱え、とつと行つて来ることにした。

???「げははははは！泣け！喚け！」

最強さん「そこまでだ！」

???「お前は！？」

最強さん「俺の名は最強さん！お前を成敗しに来た！覚悟しろ！」

???「はん！返り討ちにしてくれる！」

ヒューーーン・・・・・・・・グサツ・・・・・・・・ドサ・・・・・・・・

???「おつ俺に何をした・・・」

最強さん「いや、石投げただけ。」

???「そ、その程度で・・・（ガク）」

いやー、さすが腕力999だ。もうなんか気持ちイー

あつそうだ今頃城が襲われて頃だ・・・

と言ったかと思うと最強さんはレポートした。

???「ぬははははあ！、姫は頂いていく。」

最強さん「ちょっと待て、魔下七龍兵団長・腐敗の黒龍よ」

黒龍「！！！！貴様は・・・勇者！なぜ今ここにいる！そしてなぜこの時点でわれらを知っている！」

最強さん「まあ、お前らは何度となく倒したからな・・・」

黒龍「なにを訳の分からんことを・・・だがまあいい。ここで倒すまでだあ！！！」

そついうと、後ろにいた他の六体のドラゴンも姿を現した。

黒龍「この技で仕留めてやる！七色の龍吹い！！！！！」

これは、七体の龍の合体攻撃で、威力300に加え、瀕死以外の全ての状態異常にかかる、凶悪な技である。

黒龍「一人で挑みかかったことが祟ったな！苦しみの果てに死ぬがいい！」

しかし勇者は七色の玉を持って、平然と立っていた。

黒龍「！！！！なぜそれを持っているんだああああああああ！！！！！！！」

これは状態異常から身を守る装備品で、終盤で手に入るのだが・・・まあこっからは言わなくても分かるだろう。

最強さん「これで分かっただろう。おとなしく巢に帰れ。」

黒龍「くううう馬鹿にしおって。このまま帰れるかあああ」

と物理攻撃を挑んできた。が、

黒龍「うがあああああああ」

突っ込んできたところに指を一本出したら、黒龍の体を貫通した。

最強さん「とどめだ。ビックバン」

この一瞬、黒龍は思った。なぜこの男はこんなに強いのか、あとな

ぜ序盤から目が飛び出るほどの装備をしているのか

ぐおおおおおおおん・・・

この爆撃で散った瓦礫が他の龍たちを襲い、たちまち全滅した。

部屋の隅でキョトンとしていた姫と王は互いに向き合い、お互いが見たものを確認しあった。そして・・・

国王「おお我らが勇者！ついに龍どもを打ち破り、姫を取り戻されたのだな！」

いやいや姫とられてないし。・・・龍倒してフラグがたったのか。

国王「やはり本物の勇者は御強い。魔王が倒れるのも近い！」

最強さんは口元でふつと笑いつつ、魔王を倒すべく魔界へ出発した。

第二章（後書き）

読み終わったら評価をお願いします。

終章

〔魔王殿〕

「???」クツクツク。もうすぐ魔王七龍兵団が姫を連れて到着するころだな。まあ勇者が来るのにはまだ時間がある。ゆっくり計画を進めるか・・・」

魔王は絶望の間に一人で腰掛け、これからの計画を練っているところである。

・・・ギイ・・・

とびらが開く重い音がする。

魔王「おお！帰ったか」

しかし扉を開けたのは、魔王が待ち望んだ巨体ではなく、一人の人間だった。

最強さん「よう。また逢ったな。」

魔王「なに！？勇者だと！いつの間にここへ！？」

最強さん「ん？ついさっきここに直接ワープしてきただけ。そろそろ勇者にも飽きてきたから一瞬でかたづけさせてもらおう。」

と言うと勇者は1Gを取り出して・・・

最強さん「必殺金貨シュート！」

と、それを思いっきり投げ出した。

間一髪でそれを避けた魔王だったが3層式の城壁がいとも簡単に粉碎した。

魔王（何なんだこいつ！？無茶苦茶だ）

危機を察知した魔王は黒夢のマントを使いワープしてしまった。

最強さん「逃がすかあ！！！」

知恵999の力を発揮し、魔王の居場所を特定すると、そこへワープした。

魔王「危なかった・・・」

ここは魔王の夢の世界。本来はここに勇者を閉じ込めて、その間に世界の半分を乗っ取る計画のために使われるものだが・・・

魔王「まさか俺様が逃げるためにここへ来るとは・・・まあ暫くは安全だろう。」

最強さん「それはどうかな」

魔王「！！！！」

そこにはいる筈のない勇者が立っていた。

魔王「なぜここが分かった！？」

最強さん「勘」

魔王「なんて奴だ・・・だがここは俺様の夢の世界。貴様に勝ち目はない。」

最強さん「口喧嘩しに来たわけじゃねえ。必殺金貨シュート!」

魔王「フン! 甘い」

突然空間が収縮し、金貨は消え去った。

魔王「ここは俺の夢の世界なんだ。全てを俺の好きなように操れる。言つたろう! 貴様に勝ち目は無いと!!!!」

確かにまずかった。たぶん魔法も効かないだろうし。

魔王「こつちからいくぞ」

また空間が変化し、そこらじゅうから緑色の閃光が発射された。

魔王「それはザラキの呪文の具現化体だ。触れれば即死だ。」

なんてこった。防御999の意味がない。まあ素早さ999だから当たる筈ないんだが・・・

最強さん（あつそうだ。）

名案を考え付いた。そして魔王の懷に潜り込むと、白夢のマントを被せた。

魔王「なっなに！」

マントの効果でまた城の戻ってきた。

魔王「まっまだだ！分身！」

というと、魔王は3人になった。

魔王「どれが実体が分かるかな？」

勇者は少し考えると一番近い魔王に近づき、張り手を食らわせた。

魔王「ナバアアアアアアアアアアア」

それは魔王の実体で、腕力999の張り手を食らった魔王は、壁を突き破り、遠くに飛んでいってしまった。最強さんは着地地点にワープして待ってた。

魔王「なぜ俺様が実体だと分かった！」

最強さん「勘。止めの必殺金貨シュート！」

魔王はこの瞬間、世界の不条理さと、ゲームの開発者を恨んだ。

魔王を倒した瞬間、目の前がカツと光り、その光に飲まれた。

神崎「ん？ここは・・・」

目を覚ますと、辺りは僕の部屋で、目の前のTVにはゲームクリア

のエンディングが流れていた。」

神崎「僕は今何をしてたんだっけ？ まっいつか。」

彼は全てを忘れていた。でも、心の中に何かしらの達成感があったのも事実だ。

彼はまた、日常に身を投じていった。

真の天才には常識は通用しない。

人間の中に天才は存在しない。

人間は常に常識の檻の中で生活しているからだ。

後日談。

この後、えにくすのオラゴンクエストの開発者が全員謎の高熱に襲

われる。原因は不明だ。

また、このあとに発売されたオラゴンクエストの魔王は、全部異様に強かったそうだ。

終章（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
本当に短かったです。次回作にご期待ください（あ
評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660c/>

勇者な僕のくえすと

2010年10月11日12時27分発行